

96. 7-10 世紀アフロ西ユーラシア諸地域における世界認識の研究：新しい世界史像の構築にむけて

北海道教育大学 教育学部旭川校 教授 津田 拓郎

概要

本研究は、西欧史家とビザンツ史家、初期イスラーム史家による共同研究を通じて、7-10 世紀のアフロ西ユーラシア世界各地における世界認識を分析し、同時代人の目にうつった当時の世界のありようを解明することで、従来の世界史像に新たな一石を投じることを目的とするものである。こうした目的を果たすため、本研究ではそれぞれの研究者が自身のフィールドの史料を分析し、そこにあらわれる世界認識を調査した。本研究期間の終了段階では、研究代表者がフランク王国に関する世界認識について、研究論文を執筆したほか、各メンバーがそれぞれの領域に関して重要な史料についての翻訳を刊行することができている。現段階で明らかになったこととしては、フランク王国における『王国年代記』に見られる世界認識は、王国に直接隣接する地域の情報にほぼ限定されており、それも圧倒的に東と南向きのものであること、ビザンツ帝国やアッバース朝における世界認識を示す史料においては、西欧や北欧に関する情報がかなり希薄であることなどが挙げられる。

貴財団の助成金は物品費・図書費・旅費など多方面で活用させていただいた。特に研究の進展に貢献したのは、研究打ち合わせのための旅費であった。本プロジェクトは長年オンラインで開催していた研究会が母体となっているが、貴財団の助成を受けたことで初めてメンバー全員の対面での会合が実現し、2 日間にわたって集中的に協議を行うことができたのである。また、貴財団の助成を受けて研究が進展するなかで、本プロジェクトの成果をさらに深化させ、この時代の各地の世界認識を総合的に提示するための後継プロジェクト（科学研究費基盤 B）を立ち上げることができており、さらなる学界への貢献が大いに期待できる状況がもたらされた。

研究の背景

西欧中心主義的歴史像を相対化する方向性を持った研究は、すでに遙か以前から多様な形で進められてきた。そうした方向性の研究で、現在もっとも大きな影響力をもつのは、グローバル・ヒストリー（以下 GH）の手法を取り入れたものである。だが、GH の手法を取り入れた研究の多くは 15-16 世紀以降時代を対象としており、それ以前の時代が扱われる場合であっても、十字軍の派遣～モンゴル帝国によるユーラシア世界の統一の時代が主たる分析対象となっているため、本研究が対象とする 7-10 世紀に関しては、GH の手法を意識した研究が十分に進められているとはいいがたい状況が続いている。

この点において、唯一の例外が、アンリ・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ—』（創文社、1960 年[原著 1937 年]）以来の膨大な研究の蓄積がある、流通経済史の分野である。イスラーム勢力の地中海世界への進出により、フランク王国が地中海交易から切り離され、11 世紀以降の「商業の復活」までの期間、西欧が自給自足的経済に基づく停滞の時代に陥ったとするピレンヌの学説を再検証する形で、長年にわたり非常に多くの研究が生み出されてきたのである。近年の研究が強調するのは、ピレンヌによって停滞の時代とみなされていた 7-10 世紀においても、西欧は地中海および北海交易を通じて、外部世界と結びついていたという事実である。

ただし、ピレンヌ学説へのアンチテーゼを打ち出す研究においては、当時の西欧経済の「活況」が強調されることが多いものの、それは「従来想定されていたような停滞した中世西欧というイメージと比較した場合の活況」にすぎないという点には注意が必要である。当時のアフロ西ユーラシア世界における経済ネットワークの中心はバグダードにあり、西欧がそうしたネットワークのなかでは周縁に位置していたことを忘れてはならない。経済規模の観点から見て、フランク王国やブリテン諸島の諸政体は、ビザンツやウマイヤ朝・アッバース朝からは比較にならないほどにおくれを取っていたのである。

本研究の目的

こうした研究動向を踏まえた上で、本研究では西欧史・ビザンツ史・初期イスラーム史の研究者からなる研究チームを編成した上で、アフロ西ユーラシア世界全体を視野に入れた研究を行った。対象となる時代は、ピレンヌ学説およびその見直しの議論のなかで、流通経済史の分野において豊富な研究の蓄積がある7-10世紀である。ただし、本研究が分析対象とするのは、流通経済史ではなく、当時のアフロ西ユーラシア世界の各地域における世界認識・相互認識の問題である。

「研究の背景」のところすでに述べたように、当時のアフロ西ユーラシア世界の各地がバグダードを中心とした商業ネットワークにおいて接合していたことについては、先行研究が詳細に解明している。また、当然のことながら、各地の君主たちは戦争および外交を通じて相互に接触しており、フランク王国とアッバース朝の間の使節交換のような、直接境界を接していない政体間における接触の存在もよく知られている。当時のアフロ西ユーラシア世界は間違いなく様々な形で接合していたのである。

だが、「様々なネットワークで結びついていた世界」という魅力的な歴史像は、各地域間が一様に結びついていたかのような理解につながりかねない。西欧中心主義的歴史像も、こうした「結びつき」の重要性を過度に高く評価したことから生まれているものと思われる。ここで本研究が注目したのが、当時の人びとが世界の各地域をどのように認識していたのかという問題である。本研究には、フランク王国史、ブリテン諸島史、ビザンツ帝国史、初期イスラーム史の専門家が参加しており、各自がそれぞれの地域における世界認識の有り様を検討する。その結果生まれるのは、当時の人びとの主観に基づいた複数の世界像であり、それらは従来の研究が明らかにしてきた歴史像とは大いに異なるものとなることが予想される。

本研究では、7-10世紀という期間に対象を限定した上で、西欧・ビザンツ・イスラーム世界の3地域における世界認識を総合的に分析するという方法を採用することで、西欧史家が提示してきた西欧中心主義的歴史像とも、イスラーム史家が提示してきた主としてイスラーム世界のみで構成される歴史像とも大きく異なる新しい世界史像を生み出すことを試みた。

本研究から明らかになったこと

本研究においては、2ヶ月に1度のオンラインないし対面での研究会において、メンバーの研究成果の発表を行い、情報交換を行う形で研究を進めていった。

本成果報告書執筆段階における最も大きな成果は、研究代表者（津田）による研究論文である（津田拓郎『『フランク王国年代記』における世界認識－グローバル・ヒストリーの中のカール大帝像の見直しに向けて－』）。当該論文は、カール大帝・ルイ敬虔帝宮廷で書かれた『フランク王国年代記』における世界認識を分析したものである。

分析の結果、『フランク王国年代記』の射程が基本的に王国の隣接諸地域に限定されており、王・皇帝が直接関与している世界を超えた領域に目が向けられることがほとんどないことが明らかになった。ただし、比較的遠方に位置するビザンツ帝国については、皇帝の交代の政治的背景のような内部情報も含めてある程度詳細な情報が記載されることが多かった。ビザンツはイタリアや東欧でフランク王国と直接領域を接していることから、こうした情報はアクチュアリティを持っていたと考えられる。これとは対称的に、確実にやりとりがあったはずのブリテン諸島の情報が極めて少ないことも『王国年代記』の特徴である。フランク王国と直接境界を接していな

いアッパース朝は、大量の贈り物を持った使節が到来した時のみ言及されており（ただし贈り物の叙述は他とは比べものにならないほど詳細）、政治的・軍事的情報が一切記載されていない点が目立った。

こうした分析結果から明らかになった『フランク王国年代記』のなかの世界像は、流通経済史が明らかにしてきたものとは全く異なる印象を与えるものであった。流通経済史の分野では様々なネットワークを介して北欧・ブリテン諸島から地中海沿岸の諸地域までが有機的に結びついた様子が明らかにされていたのに対し、『フランク王国年代記』に描かれるのは、フランク王国を中心にしつつ圧倒的に東および南を向いた世界像であった。

現段階では論文化はなされていないものの、ビザンツ帝国やアッパース朝における世界認識を示す事例についても、研究分担者の研究により明らかになりつつある。これらの地域の史料においては、フランク王国をはじめとする西欧や北欧の存在感が極めて希薄であり、ここでも流通経済史が明らかにしてきた当時の世界のありようは、同時代人における世界認識とは大きく乖離していた可能性が強く示唆されている。

今後の展望

本報告書執筆段階においても、「目的」に書いた内容のすべてが解明されているわけではない。特に、ビザンツやイスラーム世界における世界認識に関する研究成果は、現状では口頭での研究報告と史料紹介の段階にとどまっている。これらの地域の世界認識についての研究成果は、本プロジェクトを引き継いだ後継プロジェクト（科学研究費[基盤 B]「初中世アフロ西ユーラシア世界における外交関係と相互認識の研究」）のなかで文字化されることとなろう。

また、各地の世界認識が明らかになった後、それらを総合して新しい世界史像を生み出すことがわれわれの研究の最終目的である。その成果は研究論文のみならず、一般読者に向けた書籍として刊行することを計画しており、既に出版社との打ち合わせが始まっている。書籍の刊行は後継プロジェクトの終了時となる見通しである。

(完)

発表論文

- 1) 田中悠子、辻大地、藤井沙希斗「イブン・クタイバ著『知識の書』訳注（1）」『一神教学際研究』第19号、2025（掲載頁未定、掲載決定済み）
- 2) 津田拓郎「『フランク王国年代記』における世界認識－グローバル・ヒストリーの中のカール大帝像の見直しに向けて－」『史流』51号、2025年（掲載頁未定、掲載決定済み）
- 3) 内川勇太「古英語版オロシウスの地理的記述翻訳：9世紀末ウェセックス王権の世界認識の解明に向けて」『史流』51号、2025年（掲載頁未定、掲載決定済み）
- 4) 仲田公輔「世界史探求における西洋前近代史分野：ビザンツ帝国の事例を中心に」前川修一・梨小田喬・皆川雅樹編『歴史教育「シン」入門：歴史総合から世界史探求・日本史探求へ』（清水書院、2025年）、296-305頁
- 5) Shigeto Kikuchi, Motivations and purposes of travels in the Carolingian age, in: Laury Sarti and Helene von Trott zu Solz (eds.), *Mobility in the Early Middle Ages, and beyond. Interdisciplinary Approaches – Mobilität im Frühmittelalter, und darüber hinaus. Interdisziplinäre Zugänge* (Europa im Mittelalter 46), Berlin: De Gruyter, 2025 (forthcoming)
- 6) 仲田公輔「ビザンツ支配、セルジューク朝侵入、そして十字軍到来の狭間で－アルメニア語史料『アブドルムセフとその子孫たちの歴史』訳注（1）」『岡山大学文学部紀要』77（2024）、53-64頁
- 7) 菊地重仁「文庫版解説：カール大帝の二つの伝記」、エインハルドゥス、ノトケルス（國原吉之助訳）『カロルス大帝伝』（ちくま学芸文庫）、筑摩書房 2024 年 12 月、217-242 頁
- 8) 菊地重仁「フランク王国研究と「ヨーロッパ」史」『文藝春秋』2024 年 7 月号、2024 年、90-91 頁
- 9) 亀谷学、大塚修、松本隆志「翻訳 イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注（5）」『人文社会科学論叢』16、2024 年、13-49 頁

口頭発表・講演

- 1) 紺谷由紀「10 世紀のビザンツ帝国における世界認識と『儀典の書』」、7-10 世紀研究会（オンライン開催、2025 年 2 月 18 日）
- 2) 津田拓郎「『フランク王国年代記』における周辺世界の描かれ方について」、7-10 世紀研究会（オンライン開催）、2024 年 12 月 9 日
- 3) Shigeto Kikuchi, Alkuins Mehrfachzugehörigkeit und Kommunikationsnetz. Eine Analyse seiner Korrespondenzen, Mehrfachzugehörigkeit im Mittelalter. 30. Jahrestagung des Brackweder Arbeitskreises für Mittelalterforschung (Marcel Bubert: Exzellenzcluster „Religion und Politik. Dynamiken von Tradition und Innovation“) 2024 年 11 月 22 日
- 4) 内川勇太「古英語版オロシウスに見るアングロ＝サクソン人の世界認識」、7-10 世紀研究会（オンライン開催）、2024 年 9 月 24 日
- 5) 田中悠子「イスラーム初期における『論駁』関係の分析」、日本中東学会第 40 回大会、2024 年 5 月 12 日
- 6) 亀谷学「アッバース朝初期における世界史と世界地理」、7-10 世紀研究会（オンライン開催）、2023 年 12 月 8 日
- 7) Shigeto Kikuchi, Expected and unexpected network-building: Translations of relics and their resonance in the Frankish world, Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia (held at Tokyo Metropolitan University) 2023 年 11 月 25 日